

URL: <http://www.sal.tohoku.ac.jp/~tsigeto/quesg/>
作成：田中重人（准教授）

比較現代日本論研究演習 II

<木1>811 教室（文学部 8F）
大学院生対象：2010 年度 2 学期

『講義概要』記載内容

- ◆ 講義題目：質問紙法の基礎
- ◆ 到達目標：(1) 質問紙調査の長所と短所を把握する；(2) 質問紙調査の実際のプロセスについて、体験を通して習得する
- ◆ 授業内容・目的・方法：質問紙を使った調査の方法についての講義と実習をおこないます。講義では、質問紙調査の基本的な概念と方法、仮説設定からレポート作成までの一連のプロセスについて解説します。実習では、受講者が各自の選んだ研究テーマに沿って文献収集をおこない、テーマへの理論的アプローチを検討し、質問紙を作成し、調査を実施し、その結果をレポートとして提出します。
- ◇ 成績評価の方法：授業中の課題（40%）、学期末に提出する質問紙（30%）、調査結果に基づく口頭発表とレポート（30%）を合計して評価する。
- ◇ 教科書：森岡清志（編）（2007）『ガイドブック社会調査』（第2版）日本評論社。
- ◇ その他：受講者は、比較現代日本論研究演習 I「統計分析入門」をあわせて受講することが望ましい。

授業の概要

目次

1. イントロダクション（10/7）
2. 仮説の設定（10/14）
3. 調査の企画（10/21）
4. 対象者の選定（10/28）
5. 先行研究と既存調査の探索（11/4）
6. 質問文と選択肢（11/11）〔各自の調査企画を提出〕
7. 調査票の構造（11/18）
8. 調査票の検討（11/25～12/2）〔これ以降、各自で調査実施〕
9. データセット作成（12/9）
10. 報告書の執筆（12/16）
11. 調査の倫理（1/6）
12. 調査結果発表会（1/13～1/20）

※（ ）内の日付は、学期前のおおよその計画をあらわしているが、実際の授業の進行状況によって前後にずれることがある。

受講生の興味に基づいた調査の企画と実施

講義と並行して、受講生各自の興味に基づいてそれぞれが調査をおこなう。

- 作成した調査票について、授業中に検討する機会を持つ（11月末の予定）
- 12月から1月にかけて各自が調査をおこなう
- 調査結果を口頭報告する（1/13, 20の予定）
- レポートにまとめて提出（2/1締切）

次回までの宿題

教科書の第1章，第3章を読んでおくこと

講師連絡先

田中重人（東北大学文学部日本語教育学研究室）
〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 文学部・法学部合同研究棟 2F
Tel/Fax: 022-795-5994
E-mail: tanakas2009@sal.tohoku.ac.jp

オフィス・アワーは定めていません。適当な時間に予約をとってください。

第2講 仮説の設定 (10/14)

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[今回のテーマ] 理論とデータの対応

1 課題

配布した調査票を見て、理論仮説と作業 (操作) 仮説との対応を考える。

- 用紙の左半分に理論仮説、右半分に作業仮説を書く。複数取り上げた場合は、対応関係がわかるよう、番号をつけるか線で結ぶなどすること。
- 作業仮説については、どの変数についてどのような分析をすればよいかかわかるように書くこと
- 教科書のほか、何を調べてもよい (教科書の対応箇所は pp. 54-62)。何を調べたかは、用紙下部に記入する。
- 周囲の人に見せて意見をもらい、用紙下部の該当欄に記入すること

2 理論とデータ

頭の中で考えたことを理論 (theory) という。実証研究においては、理論的なレベルで検証すべき「仮説」をはっきりさせたいので、それに対応したデータを集めるよう調査方法等を工夫する。

仮説 (hypothesis): 研究によって真偽を決定すべき命題

理論仮説 (theoretical —): 理論的なレベルで考えた仮説

作業仮説 (working —): データによって検証可能な仮説 (操作仮説 operational — ともいう)

理論仮説を作業仮説に翻訳する作業を「操作化」(operationalization) という。

- 理論は直接検証できない
- 検証できるのは操作仮説のみ → 「もしその理論が正しいとしたら、●●の現象が観察されるはずである」
- 操作仮説が棄却された場合 → 理論仮説か操作化のどちらかがまちがっている
- 操作仮説が支持された場合、理論仮説や操作化が正しいということが主張できるわけではない
- 科学的研究における「通説」(accepted theory) は、たくさんの研究の結果、その理論仮説を否定することができず、かつ、対立する理論仮説がすべて棄却されていることを持って成立する

理論仮説と作業仮説は必ずしも2つに区分されるものではなく、抽象的なレベルの仮説から具体的なレベルの仮説にいたる連続的・多段階のものと考えたほうがよい。

また、理論仮説と作業仮説は1対1で対応しているものではない。おなじ理論仮説を検証するために複数の作業仮説がありうる。逆に、ひとつの作業仮説に複数の理論仮説が対応することもある。

いずれにせよ、理論仮説 \leftrightarrow 作業仮説の双方を往復する想像力が重要。

3 宿題

自分が興味のある分野の実証研究の論文や本などについて、

- どのような理論仮説についてどのような作業仮説を立てて研究しているか
- その仮説をどのような手続きで検証しているか
- その手続きについて何かおかしなところがないか

次回報告。A4用紙1-2枚程度にまとめて、人数分コピーを用意してくること。論文・本なども持ってくること (1部だけでよい)。

4 文献

小林淳一・木村邦博 (編) (1991) 『考える社会学』 ミネルヴァ書房。

レイブ, C. A.・マーチ, J. G. (1991) 『社会科学のためのモデル入門』 (佐藤嘉倫ほか訳) ハーベスト社。

第3講 調査の企画 (10/21)

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[今回のテーマ] 調査の企画の際に考慮すべき事項

1 調査の企画にあたって注意すべき事項

- 仮説
- 対象 (母集団・標本抽出方法)
- 調査方法
- 日程
- 人手・費用
- 個人情報の保護・対象者へのフィードバック
- データの管理
- 調査結果の報告媒体

2 種々の調査方法

2.1 自記式と他記式

自記式: 調査対象者が自分で記入する。「自記式」ともいう。

他記式: 調査員が記入する。「他記式」ともいう。

自記式のメリット:

- 調査員によるバイアスが出にくい
- 個人情報の管理が容易
- 費用・人手がかからない

他記式のメリット:

- 訓練された調査員が書き込むため、正確である
- 回答の進めかた、手順、時間などを制御しやすい
- 調査票に盛り込めない付加的な説明を口頭で補える

→ 複雑な内容の調査に向く

2.2 回答の方法

集合調査: おなじ場所でおなじ時間にいっせいに回答してもらう

個別調査: 対象者ひとりずつ場所と時間をかえる

集合調査のほうが費用・人手・時間がかからない。そのかわり、その場の雰囲気などによって全員の回答が偏ることがある。

2.3 配布と回収の方法

- 訪問
- 訪問留置
- 手渡し
- 人づて
- 郵送
- 自由配布

2.4 メディアの利用

電話調査: 世論調査などでスピードを要求される場合に使われる。調査票を使わず、調査員が電話で質問して回答を書き込む。

インターネット調査: 市場調査などで、費用を節約する目的で使われる。回答者が偏ること、他人になりすました回答や不真面目な回答を制御しにくいという問題がある。

3 調査票作成の仕事の流れ

3.1 企画

調査の構想を確定する。目的・調査対象・調査方法について、予算・人手・期間等を考慮して決める

3.2 調査項目

- 調査票の構造
- 各項目の位置付け

大きな枠組みから決めていき、少しずつ細分化して小項目について考えていくとよい。

3.3 ワーディング

- 質問文の具体的な言い回し
- 回答選択肢

3.4 質問の流れや長さの調整

- 項目の関連性
- 対象者の負担
- 抵抗を感じそうな項目
- 全体の長さ
- ページ割り

3.5 予備調査 (pre-test)

- 質問文が適切に理解されるか
- 質問の流れに支障はないか
- 回答にかかる時間
- 回答者の負担感

対象者は少数でよい (数人から 20 人程度) が、本調査と同様の対象者を選ぶこと。回答に迷ったところや答えにくいところ、意味のつかみにくい質問文などについて、回答者の意見を集めることが目的である

4 調査設計と調査票

- 自記式と他記式 (前述)
- 複雑な調査設計の場合 (複数対象者をマッチさせる方法、追跡調査など)
- 一部の回答者のみの項目
- 自由回答とアフターコーディング

第4講 質問文と回答欄 (11/2)

田中重人 (東北大学文学研究科准教授)

[今回のテーマ] 質問文と回答欄を作成する

1 課題

つぎの各項目についてたずねる質問文 (および解答欄) を考える。調査対象としては、東北大学の日本人学生を想定すること。

- 出身地 (言語使用についての分析に使う目的で)
- お酒をどれくらい飲んでいるか

3人程度のチームを組んで文案をコンピュータで作成する

2 質問文作成上の注意

2.1 用語について

(1) 明確な質問

- 兄弟数……自分を含めるか? 死亡した兄弟は?
- 学歴……中途退学や在学中の場合は?
- 滞日年数……何度も来日している場合は?
- 労働時間……ふだんの状態 (usual status) か特定の日の状態 (actual status) か?

(2) 日常的なことばで

- 専門用語や特殊なことばは避ける
- 必要であれば、その都度説明を加える
- イメージが先行していることば (商品名など) にも注意したほうがよい

2.2 文章について

(1) 短く、意味のつかみやすい文章に

- 一読して意味がつかめるように
- 正確さを保持したままで、なるべく短くする
- 文脈や一般的常識から意味がつかみやすい文になるよう工夫する
- 2重否定文や否定疑問文は要注意

(2) Double-barreled question を避ける

- ひとつの質問ではひとつの事柄だけを聞く

(3) 過去の細かい記憶についての質問は避ける

- 重要な出来事についての客観的な質問ならよい (卒業した学校の名称、結婚したときの年齢など)

2.3 質問のタイプ

(1) 個人的質問 vs. 一般的質問

(2) 意識 vs. 実態

(3) actual status vs. usual status

(4) 単一質問 vs. 複数質問群

3 いろいろな回答形式

3.1 自由回答とアフターコード

回答欄に自由に答えを書いてもらい、あとで値をあたえる (after-coding)。回答の予想がつかない場合、選択肢が多すぎる場合 (職業など)、数値をそのまま記入してもらおう場合 (年齢など) に有効

自由回答の利点:

- 多面的な把握が可能
- 詳細な情報が得られる
- 誘導尋問になりにくい
- 回答者が不満を感じにくい

自由回答の欠点:

- 回答者の負担が大きい
- さまざまな次元の回答が混入する可能性
- 回答が標準化できない

3.2 回答選択肢 (プリコード)

あらかじめ回答の種類を制限して、値をあたえておく (pre-coding)。

- ひとつの準拠枠に沿って標準化した反応が引き出せる
- 回答者の負担がすくない
- 想定外の反応を抑制してしまう

「その他」などの選択肢を設けて、一部自由回答を併用することもできる。
プリコードの場合の注意事項

- ひとつだけ選択 (single answer) か複数選択 (multiple answer) か
- ありうる回答を網羅しているか?
- 選択肢は相互に排他的か?
- 間隔尺度としてあつかうには、最低限4つの選択肢が必要
- 選択肢が多すぎると回答者の負担が大きい (7つ以下がいちおうの目安)
- 不明・回答拒否を選択肢に入れるか?
- 選択肢のレイアウト

4 宿題

自分の関心に沿って、質問項目を列挙 (教科書 p. 142) してくる。次回提出。
つぎのことを明記：

- どのような調査対象を想定しているか
- 調査方法
- 調査の目的

次回授業は、観察室 (文・法合同棟 2F) でおこないます。

第5講 既存調査と先行研究の探索 (11/11)

田中重人 (東北大学文学部准教授)

[今回のテーマ] 既存調査を探す

1 課題

各自の関心にしがって、参考になりそうな既存調査をさがす。結果をまとめて提出。

- 分量は A4 用紙 1 枚
- 用紙上部に学生番号と氏名を書く

とりあえず、つぎのデータベースをひとつとおりに使ってみる。各データベースの性格や収録されているデータを把握すること。必要に応じて、他のサービスも使ってよい。

- SSJ データアーカイブ (東京大学) <<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/>>
- GeNii (国立情報学研究所) <<http://ge.nii.ac.jp/>>
- Google Scholar <<http://scholar.google.co.jp/>>
- Google <<http://www.google.co.jp/>>

見つかった調査について、つぎのような項目を書く

- 調査主体
- 実施期間
- 名称
- 調査法
- 調査対象
- 報告書などの書誌情報
- どうやって探したか
- 自分の研究にとってどのような点で参考になりそうか

不明の場合は「不明」などと書いておく。

2 既存調査を特定するのに必要な情報

- 調査主体・連絡先
- 実施期間
- 名称 (対象者向け／研究者向け)
- 調査法
- 対象 (母集団・標本)
- 報告書・論文・Web サイトなど
- データ・アーカイブなどの登録情報

3 既存調査の探索

3.1 探す対象

- 先行研究
- 調査
- 質問文案・回答選択肢

3.2 探しかた

- 人に聞く
- 入門書・概説書・展望論文
- 芋づる式
- 白書、データブック
- 文献データベース
- 調査データベース、データ・アーカイブ
- 尺度集

いずれの場合も、情報の収集範囲と方法、収録基準を理解して利用すること。

調査に関する資料 (質問紙など) は、非売品の報告書に載せるのがふつう。論文や本を出版する段階では省略されることが多い。このため、自分の興味にあった質問文案を探すことは非常にむずかしい。

自分の研究分野については、代表的な調査をおさえておくこと。たとえば、

あたらしい言語表現の使用実態: 文化庁「国語に関する世論調査」

日本人の社会意識: 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

また、一度の探索で網羅的に情報が集められるわけではないので、ふだんからアンテナを立てておくことが大切である。

3.3 先行研究 (論文・書籍) のデータベース

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/nik/student/litsurv.html>

報告書は図書館では書籍とおなじあつかいになっている。また、調査データを利用した論文には、調査の概要の説明があるのがふつう。

「報告書」「調査報告」などをキーワードにふくめて探すとよい。

最近では各出版社の電子ジャーナルや大学などの「機関レポジトリ」(repository) の整備が急速に進み、全文をオンラインで読んだり検索したりできる文献が増えてきている。

3.4 質問文・尺度のコレクション

特定のテーマで既存の質問文をリストした本やデータベースもある。

- 『社会調査ハンドブック』(安田・原, 1982) など
- 『心理測定尺度集』(吉田編, 2001) など
- PSDB_Mie: 三重大学 心理尺度(質問項目) データベース
<http://www.minamis.net/scale_search/mpsbmain.html>

3.5 調査のデータベース

調査そのものについてのデータベースはほとんど整備されていない。ただ、公開されている調査データを集めて2次利用のための便宜をはかる「データ・アーカイブ」(data archive) が最近発達しており、事実上、調査データベースとしてつかえる。

- SSJ データアーカイブ (東京大学) <<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/>>
- 質問紙法に基づく社会調査データベース (大阪大学) <<http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp>>
- 社会・意識調査データベース (札幌学院大学) <<http://su10.sgu.ac.jp/sord/>>

3.6 研究課題・研究者データベース

多くの調査研究は科学研究費補助金(文部科学省または日本学術振興会)の助成を受けておこなわれているので、その研究課題のデータベース中に調査の情報がかかなりある。

- 科学研究費補助金データベース(国立情報学研究所) <<http://kaken.nii.ac.jp/>> (GeNii から一括検索できる)

また、大学などでは所属する研究者(教員・研究員・博士課程学生などをふくむ)の研究成果の情報を収集している。これを集積したデータベースが公開されており、そこから各研究者がおこなった調査の情報を得ることができる。

- 研究開発支援総合ディレクトリ ReaD(科学技術振興機構) <<http://read.jst.go.jp/>>

3.7 インターネット検索エンジン

インターネットで公開されている情報は、サーチ・エンジンでヒットするはずである。「報告書」「調査報告」「調査票」「質問紙」などをキーワードにふくめて探すとよい。ノイズが非常に多いので必要な情報をふるいわけするにはかなりの熟練を要する。

Google Scholar <<http://scholar.google.co.jp/>> は学術情報に特化した検索サービスである。非学術的な情報がカットされているのでその分ノイズがすくない。

4 本人への問い合わせ

調査主体はわかったが詳細な情報が公開されていない場合は、本人に問い合わせるとよい。調査報告書などには連絡先が通常書いてあるし、雑誌論文にも著者所属やメールアドレスなどが書いてあることが多い。また上記の ReaD などでも連絡先を調べることができる。ただし、問い合わせの前に、公開されている情報をできる限り集めてから。

5 宿題

各自の関心にしがって先行研究あるいは調査を探す。なるべく報告書や調査票など、その調査自体の内容について詳しいことがわかる資料を探すこと。

集めた情報のうち少なくともひとつについて、つぎのことをまとめて提出

- 調査を特定するための情報
- その情報源についての書誌情報
- どういう点が自分の研究に役立ちそうか
- 調べたプロセスと、苦労した点

6 文献

- 川端亮(編)(2010)『データアーカイブ SRDQ で学ぶ社会調査の計量分析』ミネルヴァ書房。
- 佐藤博樹・石田浩・池田謙一(編)(2000)『社会調査の公開データ: 2次分析への招待』東京大学出版会。
- 安田三郎・原純輔(1982)『社会調査ハンドブック [第3版]』有斐閣。
- 吉田富二雄(編)(2001)『心理測定尺度集II』サイエンス社。

第6講 調査票の作成 (11/18)

田中重人 (東北大学文学研究科准教授)

[テーマ] 調査票作成にあたって注意すべき事項

1 調査票全体の様式

1.1 分量

調査対象者の負担や回答時間を考えて上限を決める。多くても16ページくらい?

1.2 印刷の形式

両面刷りで、製本して冊子体にするのがふつう

- 余白をじゅうぶんにとること
- ひとまとまりの質問項目を1ページにおさめること
- 1ページ内のレイアウトが複雑になる場合は、DTPソフトを使うか、印刷所に組版を依頼するとよい
- 各ページにページ番号をふる
- 色紙や高級紙を使ったり、カラー印刷すると、通常の書類と差別化できる

2 1ページ目の様式

教科書 pp. 162–160 を参照

2.1 タイトル

- 調査の内容を的確に表すタイトルをつける。
- ただし、難解な語句や調査対象者の反発を招く表現は避ける
- 研究者向けのタイトルと調査対象者向けのタイトルを別にするのも多い

2.2 調査主体・連絡先

- 調査をおこなう主体と責任者名、所属、学年
- 住所・電話番号・メールアドレス

2.3 あいさつ文

- 自己紹介
- 調査の目的や意義 (詳しく書くことで、回答者の動機づけの高まることが期待できる)
- 個人情報やプライバシーの保護について
- 結果の報告先や公表媒体
- 対象者の選定方法

調査票とは別の紙に「あいさつ」を用意する場合もある。

2.4 記入上の注意

選択肢のえらびかた、数字の記入法、「わからない」ばあいはどうするかなど。回収方法まで指示することもある。

3 調査票の最後

- 終わりのあいさつを入れる (教科書 pp. 163–165)
- 調査への感想や調査主体への意見を書く欄を設けることも多い

4 質問のならばかた

4.1 全体的な配列

答えやすいものを最初に、私生活に関するものを最後に (教科書 p. 159)。

- Face sheet (性別・年齢などの基本的な属性)
- 調査の中心的な項目 (意識など)
- 私生活に関する項目 (家族構成、収入など)

たがいに関連する項目や、回答対象者を限定する項目はならべて配置する。

- 前後にどういう項目がくるかによって、おなじ質問文でも回答が変わることがある (carry-over effect)

4.2 回答上の指示

- 対象者を限定する場合
- 非該当の対象者のジャンプ先 (通常は質問番号で指示するが、ページ数を付加する場合もある)

太字にするなどして目立たせる。できればページの最上部に来るように工夫する (教科書 p. 164)。

4.3 質問番号と見出し

各項目には番号をつけ (問1, 問2, ... など)、その後に質問文をつづける。質問番号の前に話題転換のための文を入れることがある (教科書 p. 163)。

5 予備調査と校正

本調査の前に、かならず予備調査(第3講資料参照)をおこない、調査票を修正する。

最終版を印刷する前に、細心の注意を払って校正すること。小さなミスがのこっていると、それだけで調査が台無しになることがある。

6 次回・次々回の予定

調査企画と質問紙について各自報告。

- 資料を人数分用意すること
- 5分程度で内容を説明して、そのあとディスカッション